おかしければ笑う、悲しければ泣く

正岡子規の歌

佐伯　裕子

柿の実のあまきもありぬ柿の実の
　　しぶきもありぬしぶきぞうまき

正岡子規

牛乳が好きなので、よくキオスクで立ち飲みをする。家にいるときは、少しぐらい古くても沸かさずに飲んでしまう。この夏、大手の牛乳会社の製品によって、大勢の食中毒患者がでた。製造過程に重大な不注意があった。それを知って、別の牛乳会社は殺菌消毒を強化した。どちらも怖い話である。清潔なミルクを飲みたいと思う反面、人々が以前よりも雑菌に

弱くなったような気がして、そのほうに不安を覚えている。

美味しくて清潔な食物を摂り、痛いところがあればすぐに効く薬をあてがう。それがあたりまえになると、少しの雑菌にも体が反応して、さらに殺菌消毒の方向に走っていく。後戻りができないのである。牛乳会社の不備をかばっているのではない。そんなことを思うのも、不潔さや痛みなどの人間社会の負の面が、むしろ精神性を鋭く磨き、さまざまな創造世界を生み出した事実があるからである。

わたしは、結核性カリエスで身体中に膿が滲み、一歩も歩けないまま、激痛に泣きながらも俳句と短歌の改革をなした、あの正岡子規を思いだす。

慶応三年（一八六七年）に松山市に生まれ、十七歳で東京に出てきた子規は闊達な文学青年であった。俳句や小説を創作し、夏目漱石との交遊を深めるかたわら、明治二十年代初めには数年間にわたって友人とベースボールの試合を行い、キャッチャーを務めている。行動派で新しい物の好きな子規が、体に不調をきたしたのは二十六歳ごろであろうか。その年、子規は帝国大学国文科を中途退学している。俳句に熱中することもあったのだろうが、体に異変を感じてのものと思われる。にもかかわらず、子規の闊達さは、ついに念願だった日清戦争への従軍を実現させてしまう。戦地で森鴎外に会えたとはいえ、帰国の船で喀血してからは、いっそう病勢がすすんでいく。

その病勢の凄まじさは、随筆の『墨汁一滴』『病牀六尺』『仰臥漫録』と、順を追って読むと手に取るように伝わってくる。カリエスと素手で戦っていた病床そのものが、血と膿だらけの戦場のように迫ってくる。子規は三十六歳で亡くなっているが、よくそこまで生きら

れたと感心するばかりである。

明治三十三年四月付けの高浜虚子宛の書簡には、大好きな俳句の例会をやめる決意が記されている。また同年の十二月に叔父宛に書いたものは、包帯を取り替えるときは苦しくて泣けることもある、と訴えている。

『墨汁一滴』の記述は悲痛なものだが、文章はからりと乾いている。

をかしければ笑ふ。悲しければ泣く。併し痛の烈しい時には仕様がないから、うめくか、叫ぶか、泣くか、また黙つてこらへて居るかする。其中で黙つてこらへて居るのが一番苦しい。盛んにうめき、盛んに叫び、盛んに泣くと少しく痛が減ずる。

明治三十四年四月十九日

また『仰臥漫録』には、より詳しい末期の病状が記される。

腸骨ノ側ニ膿ノ口ガ出来テ其近辺ガ痛ム、コレガ寝返リヲ困難ニスル大原因ニナツテ居ル。右ヘ向クモ左ヘ向クモ仰向ニナルモイヅレニシテモ此痛所ヲ刺激スル、咳ヲシテモコヽニヒビキ泣イテモコヽニヒビク。

繃帯ハ毎日一度取換ヘル。コレハ律(妹・筆者注)ノ役ナリ。尻ノサキ最痛ク僅ニ綿ヲ以テ拭フスラ尚疼痛ヲ感ズル。背部ニモ痛キ箇所ガアル。……此際ニ便通アル例デ、都合四十分乃至一時間ヲ要スル。

同年十月二十六日

まさに阿鼻叫喚と子規は書いているが、介護をしている妹と母にとっても苦痛の日々だった。悪臭と結核菌の温床に、母も妹もまた日々まみれているのである。

しかし、今からみると、何とも鷹揚なことに、子規は臨終までさまざまの食物を大量に食

べつづけたのである。サシミ、果実、佃煮、饅頭……そして牛乳。子規は牛乳が好きだったらしく、臨終の際には、虚子に「牛乳を飲まうか」といい、ゴム管でコップ一杯を飲みほしている。「食フタ者ハ少シモ消化セズニ肛門ヘ出ル」というのに。死に向かう人間の健全さというものをそこに見てわたしは息を呑んだ。

これを無知というのは簡単だろう。ああ、現代医学の時代に生きていてよかった、と安堵するのもいい。だが、その阿鼻叫喚の戦場にふつふつと沸いていた熱気は、いったい何だったのだろう。清潔な医療を受けられる現在の白いベッドから無くなってしまったものは、そういうわけのわからない熱気だったのではないだろうか。

枕元にはいつも短歌や俳句を作る仲間を呼びよせていた。詩歌を革新しようという企てのうちに、子規は悪臭ただよう病床にありながら時代を動かそうとした。

そして、確かに時代の表現は動いた。後につづく伊藤左千夫、長塚節、島木赤彦、斎藤茂吉、さまざまに新しい短歌を拓いていった歌人たちは、子規の新しい息吹に育てられたのである。

四年寝て一たびたてば木も草も皆眼の下に花咲きにけり
青空に聳ゆる庭の葉鶏頭（カケイトウ）は我にあるけといへるに似たり
くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる
いちはつの花咲きいでゝ我目には今年ばかりの春行かんとす
わが心世にしのこらばあら金のこの土くれのほとりにかあらむ

〔歌人〕

あはれひとつの息を息づく

永井ふさ子の歌

佐伯　裕子

光放つ神に守られもろともにあはれひとつの息を息づく

（昭和十一年　斎藤茂吉・永井ふさ子合作）

同時多発テロが起こった二〇〇一年九月十一日以降、すべてのものの見方が大きく変わった。政治向きのこととか、「これ以上血を流して欲しくない」という戦況に対する感慨だけではない。何気なく見ていた日々の風景が、自分でもおやと思うほど違って感じられる。

わたしは無類の映画好きで、これという新作はかならず映画館で観る。どのような凡作でも、映画代を損したとは思わない。ああいう爆発テロのシーンは、それこそ特殊撮影やC

G画面で何度も観た光景である。映像では見慣れた場面だったが、テレビに映った現実の突撃は違った。テロ以前に作られて、いま公開中の新作『ソードフィッシュ』にも、超高層ビルにヘリが突っ込むシーンがある。このたび客席にいて、観客のほうに、ゆとりをもって荒唐無稽なシーンを眺める楽しさが失せていることに気づいた。

現実のほうが空想を超えてしまった日付、それが二〇〇一年九月十一日だったのではないだろうか。映像がそうならば、では言葉のほうはどうなのだろう。「歌」はどうなのか、客席にいながらしきりにそのことが思われた。

掲出歌は、斎藤茂吉の晩年の恋人だった永井ふさ子が、茂吉と合作した歌である。というよりは、上の句を茂吉が作り、ふさ子に下の句を付けさせたものである。「光放つ神に守られもろともに」の下に句を付けよという、ふさ子宛の茂吉の書簡が残っている。ふさ子は初め「相寄りし身はうたがはなくに」としたのだが、「弱い」と言うので、「あはれ一つの息を息づく」にしたら「大変いい」と言われた、と後に記した。

茂吉五十五歳、ふさ子二十七歳のときの合作であり、恋が成就したころの歌であった。茂吉とふさ子との出会いは、昭和九年、正岡子規三十三回歌会の席だった。茂吉は、歌友である平福百穂と中村憲吉を病いに失い、妻てる子のスキャンダル事件に悩まされ、ひとり失意の底にあった。ふさ子の父が子規の幼友達だったことが、二人を親密な思いに駆り立てたといわれている。

ふさ子の遺歌集となった『あんずの花』(平成五年刊)に永井ふさ子のポートレートが掲げられている。出会いのころの写真である。その光り輝く美しさを見ると、子規のゆかりであ

ろうとなかろうと、茂吉が息を呑んで心惹かれたことは容易に想像できる。

茂吉から送られた手紙は百五十余通あった。のちに不安になった茂吉から焼き捨てるように頼まれるのだが、ふさ子は三十通余りほど焼いて残りを保存した。ふさ子が時を経てからそれを公開したために、秘めていた恋があからさまになったのである。

どちらが悪いというのではない。恋というものは、醒めてみると、そういうような現実的な事態に押し潰されるものである。あからさまになるとまずい、と分かっていながら、「ふさ子さん！　ふさ子さんはなぜこんなにいい女体なのですか」などと百五十余通の恋文を書き送ってやまない。それが、歌びとであり人間なのである。

茂吉はこの恋を捨て、養子先の斎藤家とアララギの宗匠としての面目を選んだ。それにもかかわらずふさ子は、一度は別の男性と婚約するのだが、茂吉のことが忘れられずに一生を独身で通した。それも、ふさ子という歌人の意思であり選択なのである。どちらが悪いなどの詮索はつまらないことであろう。

だが、わたしは一つだけ心を止めたいことがある。それは、ふたりの恋の歌（性愛の歌）の師と弟子の合作が、わたしにとっては眼もくらむばかりに官能的で、妬ましいほどの力を持っていたことである。それが、九月のテロ事件を経たいま読み返しても、同じ感想をもって迫ってきた事実なのである。

ふさ子は才能のある歌人とはいえない。茂吉との恋愛事件がなければ、美しい若い歌仲間として、アララギ歌人の思い出にのみ残った女性にちがいない。てる子夫人の行動から推察しても、茂吉が男性としてそれほど魅力的だったとは思えない。だが、茂吉は類稀な言

葉の錬術師だったのである。ひとえに、歌の道の優れた師とその弟子という関わり方に、普通ではない不可思議な官能の力があるように思えてならない。わたしは、その官能世界が、テロによっても浸食されなかった不思議を思うばかりである。

「あはれひとつの息を息づく」……。実際に、茂吉とふさ子の現実の恋のありさまをのぞくことができたとしても、掲出歌が漂わせる甘やかな吐息の切なさには叶わないのではないだろうか。

ふさ子の唯一の歌集であり遺歌集となった『あんずの花』に、六十歳後半の歌が記されている。昭和二十八年の茂吉の死もニュースによって知ったほど、縁の切れていたふさ子が、四十九年に茂吉のふるさとを訪ねた折りの歌である。

過ぎにけるひとつ嘆きもおくつきになに愬へむ淡き秋の日
言絶えてわれは額伏す現世にいのち相触れし縁おもひて
遺されし背広の前に息をのむその腕に胸に生生し甦るもの　（茂吉記念館）
最上川の瀬音昏れゆく彼の岸に背を丸め歩む君のまぼろし
小国川瀬見のいでゆを浴みにけりやうやく君の齢に近く

何年経ってもふさ子の心のなかでは、まるで現実さながらに、恋したときの茂吉の息が流れていたのである。

〔歌人〕

君の歌は瘤の樹をさするやうだ

宮柊二の歌

佐伯　裕子

ひきよせて寄り添ふごとく刺ししかば声も立てなくくづをれて伏す

『山西省』

日本が敗戦を迎えた昭和二十年八月十五日の空は、これ以上ないほどに青かった。焦げるような青空の下で、さまざまな人々が、何となく空を見上げていた。そう聞いている。ニューヨークのテロ爆撃を映像で見て以来、青い空を仰ぐと、ふいに、見たことのない敗戦の日の空が想像されてくる。

最近、待望の全歌集が編まれた故葛原妙子の歌に、その空をうたった一首があった。

落つるものなくなりし空が急に広し日本中の空を意識する　　妙子　　『橙黄』

葛原は東京を離れて、疎開先で終戦を迎えたのだが、疎開地といえど上空を爆撃機が行き来していた日々だった。昭和二十年になると、いつ日本中が爆撃されるか分からない状況だった。戦争がついに終結して、もう何にも落ちてくるものがなくなったと知ったとき、どれほどのびのびした気持ちになったことだろうか。そういう気持ちを、「空が急に広し」と表し、「日本中」の空の青さに遠く心を放った歌なのである。

爆撃や原爆から逃れて生き延びた女性たちは、葛原妙子のように日本の地で、青い青い空を仰いでいた。

男性たちは、戦地にあってさまざまな敗戦を体験していた。悲惨な戦死を遂げた歌人たちも多かった。『支那事変歌集』、『渡辺直己歌集』など、優れた戦争歌集がいまに残されている。宮柊二も、そういう体験を歌集に残した歌人だった。

大正元年、新潟県魚沼郡に生まれた宮柊二は、中学校を卒業してから進学を断念して家業を手伝っていた。少年時代から歌が好きで、二十歳の時に北原白秋の門下となり、厚い信頼を受けていたのだが、ふいに白秋のもとを辞去してしまう。その年、昭和十四年に召集されて、柊二は大陸に出征した。それからは、中国山西省をはじめ、各地の戦闘に参戦して敗戦を迎えたのである。

掲出した一首は、柊二が日本に帰還してから、昭和二十四年に出版された歌集『山西省』に収められたものである。

「ひきよせて寄り添ふごとく刺ししかば」という。山中に中国の敵兵とまみえた際の顛末であろう。戦争にあっては、敵兵を殺すことは正義であり、犯罪ではなかった。殺さなければ自分がやられていたにちがいない。刺したと思ったそのとき、兵が「声も立てなくくづをれて」伏したのである。

自分は一人の敵を殺した、そう一首は言挙げしているのだが、歌は暗く湿りをおびたものになっている。敵兵である相手に、あわれなほど愛情をもっているかのように読める。かつて、この歌一首のみを鑑賞したときに、まるで心中や情死のときの歌のようだ、といった女性がいた。わたしも、そう思えることがあった。どこかほの暗い、官能的な美を漂わせているのである。

あの戦争は悪そのものだった、ことに大陸での戦闘は侵略戦争であった、そう断罪された戦後に、柊二はこの歌集を出版した。歌人として、そこをこそ戦後の自分の出発点にしようという強い決意があった。

おそらくは知らるるなけむ一兵の生きの有様をまつぶさに遂げむ　『山西省』
こゑあげて哭けば汾河の河音の全く絶えたる霜夜風音
ねむりをる体の上を夜の獣穢れてとほれり通らしめつつ
自爆せし敵のむくろの若かるを哀れみつつは振り返り見ず
あかつきの風白みくる丘蔭に命絶えゆく友を囲みたり

愛憎なかばして辞去してきた師北原白秋は、柊二のことを、「君は暗い」「君の歌は瘤の樹をさするやうだ」といっていた。その白秋の死を柊二は戦地で知ることになったのだが、突然のように辞去してきて、それきりになってしまった身を思い、いかばかり悲しみにくれたことだろう。

だからこそ、おそらく誰に知られることもない「一兵」が、この大陸の山中で敵兵と戦いながら生き抜いた事実を、歌という詩型にして伝えたかったにちがいない。瘤の樹をさするように、暗く曲がりくねった寂しい戦場の歌を『山西省』として差し出したのである。

そのなかで、とりわけ冒頭の敵兵を刺し殺した歌は、柊二が白秋の愛弟子であったことを物語る一首といっていい。どこか、人の死（タナトス）がエロスに重なるような、危うい美しさを漂わせる歌なのである。

敗戦を迎え、日本に帰った柊二は、「一兵」であったという意識を、それ以降の作品のなかにも引きずっていく。「あったこと」から決して身をずらさない決意、それだけが、戦後を生きる支えとなった。柊二の歌は、暗く、瘤ばかりの寂しい樹のようであった。そうして、そうすることで、歌の中から、傷だらけの兵士はゆっくりと再生していったのである。

たたかひを終りたる身を遊ばせて石群（いはむら）れる谷川を越ゆ　『小紺珠』

この夕べ堪（たん）へ難くあり山西（さんせい）のむらむらとして頭（こうべ）ち来（く）もよ景色

〔歌人〕

国のため君のためとぞ思はずば

中島歌子の歌

佐伯　裕子

君にこそ恋しきふしは習ひつれさらば忘るることもをしへよ

中島歌子『萩のしづく』

ペリーが来航して、鎖国日本が開国されてから今年で百五十一年目になる。こういうふうに言えば歴史の一行になってしまうのだが、当時の人にとっては簡単に割り切れる事態ではなかった。それこそ天と地が引っ繰り返る騒ぎであった。

『一億人の昭和史』(毎日新聞社・一九七七年刊)を見ていたら、開港直後の横浜港の写真があった。手前に洋館建の外人居留地が広がり、海には何艘もの汽船が並んでいる。開港前は、その汽船が大砲を備えた軍艦であり、そこから威嚇をされ続け

ていたのである。人々の驚愕と恐れはいかばかりであったろう。一枚の横浜港の写真を見ただけでも、その驚愕が伝わってくるようだった。

樋口一葉なつ子が入門して和歌を教わった「萩の舎」の歌人、中島歌子は、そういう幕末の混乱に深く関わりながら生きた女性である。明治十年、東京小石川に歌門「萩の舎」を開いたときには、幕末から開国への混乱期をくぐり抜けた後であった。

埼玉県川越市は歌子の母方の実家のあったところで、幕府のお膝元である川越藩は、もっとも辛い役目である夷狄襲来に備える海岸警備を強要されていた。藩の財政は困窮する一方であったが、地元の豪商だった「網谷」が全面的に援助した。その「網谷」が、歌子の母の実家だった。歌子の母は、若い日に川越城に奥女中として上がったことがあり、歌子は、少女時代から、夷狄襲来の深刻さを身に沁みて受け止めていたのである。

また、中島家は江戸の小石川で「池田屋」という宿屋を営んでいた。池田屋は藩士や商人たちの郷宿の役割をしており、多くの血気盛んな水戸藩士が出入りする宿だった。その縁で、歌子は水戸の若き藩士、林忠左衛門と結ばれるのだが、武士と商人の正式の結婚は困難で、歌子の短かった夫婦生活も形のうえでは同棲といってよいものであった。

開国を巡る水戸藩内の対立は凄まじく、「天狗党」のような激しい乱党を生み出したのは周知のことである。歌子と池田屋は、資金面はもとより、彼ら水戸藩士の拠点となって援助し続けた。だが、時代の趨勢は止めようもないことであったろう。夫の忠左衛門は、井伊直弼が暗殺された桜田門事件には参加しなかったが、藤田東湖の遺児、小四郎の水戸藩内紛の決起に巻き込まれて死んでいる。忠左衛門二十五歳、歌子が二十一歳の時であった。忠左衛門は鎮圧派であったといわれるが、夫の死後は決起の残党として、歌子も二ヵ月の投獄処分を受けたのだった。

歌子が「萩の舎」を開いて、前田侯爵邸などに出稽古をするようになったのは、池田屋が傾いた明治十年になってからである。

かへらじとちぎるもつらき別れかなくにのためとて仇ならぬ身を
忠左衛門

国のため君のためとぞおもはずばいかにしのばむ今日のわかれ路
歌子

いく度か月にかかれるうき雲のはれてしづかにみるよしもなし
同

その死に寄せて（筆者注）

住人（すむ）もあらしの庭のきくの花ありしながらにほひうつるな

歌子

明治二十五年三月に、一葉が読ませてもらった歌子の秘記『秋の寝ざめ』の中の、夫と歌子の別れの歌である。「帰るまいと思いながら、夫婦の愛を交わすのも辛い別れであるなあ」という夫、「国のため君のためと思うからこそ、このような辛い別れも忍びましょう」という妻の相聞である。後に書かれた秘話であるから、文学的な装飾もあるが、国にも夫にも、素直で若い歌子の愛情が通っている。

だが、「萩の舎」時代になってからの未亡人歌子は、後ろ盾の存在が囁かれるなど、恋多き女性であった。遺歌集の『萩のしづく』に掲載されている恋の歌は、いずれも「恋」という「題」によってうたわれたものだが、歌子の恋愛に寄せる成熟ぶりの窺われるものである。

互疑恋

よしされば我もはかりてはかるらむ人の心もこころみてまし

不惜名恋

片恋になげかむよりはうき名だに互にたたばうれしからまし

寄水鶏恋

くひなぞとおもひながらも人をまつ心や我をなほはかるらむ

そうして、冒頭に挙げた一首「君にこそ恋しきふしは習ひつれさらば忘るることもをしへよ」には、「いひかはしける人の今は思ひ忘れぬといへりければといふことを題にて」という詞書が付く。恋を教えてくれたなら、忘れることも教えよと、男に忘れられた女の痛烈な皮肉を込めているのである。「恋」という男女の駆け引きに寄せる疑わしげな眼差し、あるいは恋そのものを遊ぶ心、何よりも「恋愛」自体がそもそも何であるのかという分析的なメスが入っている。秘記の歌に覗く、夫への直截な思いとは全く違う恋の歌になっている。

開国前夜を戦い抜いた男たちの血しぶきを浴びた果てに、歌子は醒めた眼差しを持つようになった。それは人間不信といっていいほどの怜悧さを備えたものであった。つぶさに見ていくと、そういう醒めた、分析的な視線が、若い一葉なつ子の歌に繋がっていることがわかる。一葉は、文章の師、半井桃水への屈折した恋情をつぎのようにうたった。

つれなさようさよとかつはにくみてもその人やがて恋しきやなぞ

樋口一葉

この歌には、恋の思いをストレートに伝えようとするよりも、複雑怪奇な恋愛心理を分析しようとする意思が先立ってみえるだろう。古い和歌の文脈にあって、恋を分析する一葉の視線がはみ出して来そうな一首である。

日本が突然に開国されて、雪崩のように入ってきた西欧文化の波の中で、中島歌子は一つの時代に敗れ去りはしたが、樋口一葉という作家の視線を用意する、もう一つの新しい時代の幕開けを、知らず知らずに導いていたのではないだろうか。二十五歳で潔く死んだ忠左衛門と、そこから後をしたたかに生き抜いた歌子、歴史の継続というものの厚みを、わたしは歌子の生に読み取っている。

〔歌人〕

世の中はたのしきものを

田山花袋の歌

佐伯　裕子

午すぎの町をすぎゆく獅子舞の笛わがまどの紙にひゞけり

田山花袋

一人の作家に抱く印象というものは、不思議な錯覚をともなうところがある。明治四十年に、陰々滅々とした小説『蒲団』を出版し、自然主義文学の一時代を築いた田山花袋である。その花袋が、青年期から、平明で情感を籠めた短歌を作っていたことを知って、わたしは驚いた。最近になって、花袋の歌をまとめて読む機会があったのである。しかも花袋は、大正七年に初めて刊行された歌集『花袋歌集』に、常にない昂（たかぶ）りを見せたという。すでに小説家として名声を得ていたにもかかわらず、歌に寄せる愛着はそうとうのものであったらしい。

冬の川すきとほりても見ゆるかなおよぐあひるの水かきの色

『花袋歌集』

おもふ子がまゆをり〳〵に眼に見ゆる若葉のかげの静かなる日よ

うづみ火にひとりむかひてなつかしき人のことのみ思ふ夜半かな

ゆけどゆけどつきぬ並木の松風の声の中にてけふもくれぬる

わたしはこの数年、もう一度読み直しておこうと思って樋口一葉の作品に接している。一葉の周辺を見るなかで初めて花袋の歌に出会ったのだが、さらに、花袋が一葉と同世代の文人だったことに気がついた。中学生のころに読んだ『蒲団』『田舎教師』などで、明治四十年代以降に一時代を築いた文人という記憶があったせいだろうか。一葉よりもずっと下の世代の人だと思い込んでいた。花袋は一葉の一歳年長で、明治四年に生まれていた。

一葉が明治二十五年に発表した小説「うもれ木」と同じ号の雑誌「都の花」に、花袋も初期の作品「新桜川」を掲載しており、少女期から中島歌子に和歌を習った一葉のように、花袋も同じころ桂園派の歌人、松浦辰男のもとで和歌を作っていた。花袋の文学的出発は一葉と同じ時代、同じ土壌にあったのである。

二十四歳で没した一葉は、花袋の小説について感想を述べることはなかったが、花袋の方は随筆集『東京の三十年』(大正六年刊)で次のように記している。

「一葉女史があの天才を抱いて、ああした不自由な文章を書いたのも、当時の文体の不統一を語っている好い証拠だ。」

一葉の文章に対して「不自由」と言い、「あの天才を抱いて」という言い方には、ほんの少しだが皮肉めいた冷笑が混ざっているようだ。それくらい、小説家としての二人の距離はかけ離れたものであった。

田山花袋は、明治四年に群馬県(旧栃木県)に生まれた。館林藩士だった父鋼十郎の第六子で、本名を録弥といった。旧派和歌に習った初期のころの歌には、この本名が使われている。父は、同郷の元館林藩士を頼って上京し巡査になったが、明治十年の西南の役に志願して戦死している。当時、下級官吏の職を得た旧藩士で、西南の役の鎮圧に志願したものは多かった。新政府の側について、旧幕臣たちを鎮圧するという下級官吏の思いには、いまでは想像しがたい屈折があったにちがいない。

幼年時代に父の戦死に遭い、小学校を中退して本屋に丁稚奉公に出た花袋に比べれば、一葉の幼女時代はゆったりとしたものだったのだろう。山梨から出奔した一葉の父は、江戸で同心株を買って武士になった人だった。念願の武士になっ

てすぐに維新となり、新政府のもとで働いた時期がある。混乱の中にあっても、もともと武士ではなかった一葉の父は、生きていくうえの才覚を十全に発揮できたのではないだろうか。

一葉とは別の意味で、花袋は生活苦のただなかを生きた文人だった。どこか冷笑的な一葉に寄せる感想には、そのような社会への冷えた視線が潜んでいるように思われる。

私の小さな子僧姿を私は東京の到るところの町々に発見した。最初、私は年上の中小僧に伴(つ)れられて、或は車を曳いたり、或は本を山のように負ったりして、取引先やお得意の家を廻って歩いた。ある冬の日は、途中から俄かにぼた雪になった。雪に艱まされて、背中には沢山な重い本、下駄にはごろごろと柔かい雪がたまって、こけつ転(ころ)びつして、漸く一緒に行った番頭に扶けられて車で帰って来た。私はまだ満九年十月になったばかりの幼い子供であった。

『東京の三十年』(講談社文芸文庫)

幼い花袋は、祖父に連れられて、田舎の城下町から河舟で東京に来た。祖父から伯父、知人の手を経て、京橋の本屋で住み込みの小僧になったのである。明治十年

代の半ば、まだ「天保銭」が流通していたころだった。霜焼けで真っ赤に膨れた小さな手足が、切なく浮き上がってくる回想だが、花袋の筆は抑え気味だ。かすかなユーモアさえ潜ませているのである。

そういう花袋にとって、当時の観念的な文学青年たちがどのような存在に映っていたか、たやすく想像できるだろう。ことに、晩年の一葉が親しくなった馬場孤蝶ら「文學界」の青年たち、彼らに寄せる屈折ぶりは次の一首に象徴されていたと思われる。

北村透谷君をいたみて

世の中はたのしきものをあはれ君なにをいとひてひとりゆきけん

花袋

「文學界」の同人だった北村透谷は、明治二十七年に自死した。精神的混迷と煩悶の果てであった。透谷の追悼号の「文學界」(同年六月)に、花袋は一首のみ悼歌を投稿している。「恋愛」「情熱」という観念的な思案のうちに煩悶し、自死した透谷へ、皮相な追悼歌を捧げた花袋の現実的な視線はどうだろう。悲しみの追悼号にあって、ふと異様な感じさえ醸しているのだ。

「世の中はたのしきものを」という花袋は、二十四歳になっていた。追悼号に溢れる若々しい悲傷の声とは反対に、強いて、したたかな分厚い生活人の顔を見せたにちがいなかった。

樋口一葉を、「あの天才」をもってしても「不自由な文章」を書いた、と回想した花袋。そのような皮相な眼差しが、透谷への追悼歌にも徹(とお)っているのだろう。この皮相な悼歌の背後には、「こけつ転びつ」して世の中を生き抜いてきた、霜焼けに膨らんだ「小僧」の姿が浮かんでくるのである。

だが、なぜかこの一首は『花袋歌集』には収録されなかった。わたしは、この一首を歌集から外した花袋の真意を、くらぐらと想像するばかりである。

〔歌人〕